

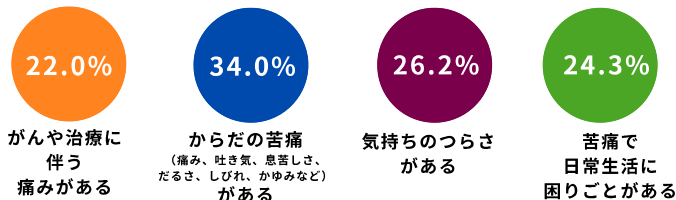
世界ホスピス緩和ケアデー 2026 メインテーマ

Pain Management is an Essential Part of Palliative Care

“痛みのない時間”を取り戻すことは緩和ケアの不可欠な要素です

日本のがん患者における「痛みの現在地」

がん患者さんにとっての痛みは
「今も身近」な問題です。

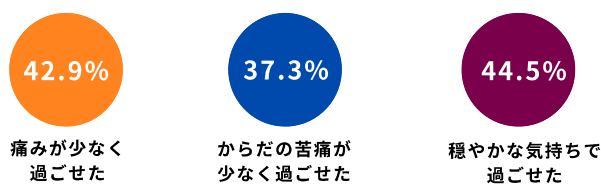


「痛みがある人は約5人に1人」

身体・こころ・生活への影響を含めると支援が十分ではありません。

国立がん研究センター 令和5年度患者体験調査（2021年診断患者,2025年5月報告）より

患者さんやご家族は「満足できていた」か
がん患者さんのご家族の視点

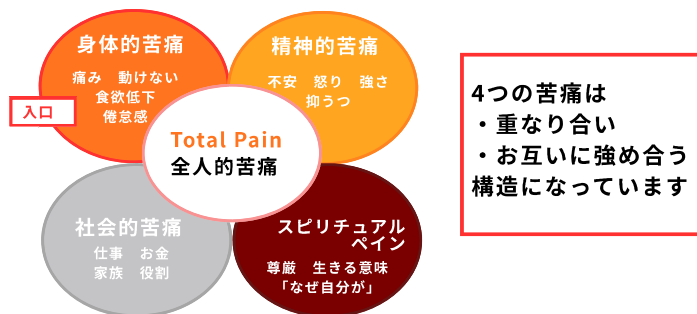


亡くなられた場所で受けた医療に「全体的に満足した」ご家族は74.9%
全体としては満足できていても、痛みや苦痛があったと感じるご家族は存在します。

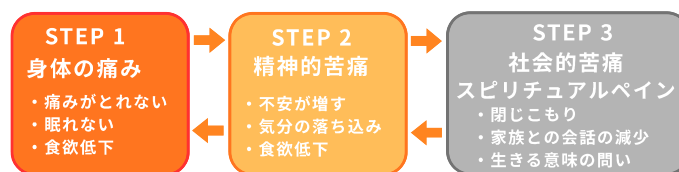
遺族調査報告書（国立がん研究センター,2025年5月）より

全人的苦痛の中で、身体の痛みは「すべての入口」

全体的苦痛（Total Pain）の中で
身体的苦痛はすべての「入口」です



「入口」＝身体的苦痛を和らげるとなぜ全体
がよくなるのでしょうか



身体の痛みは他の苦痛を強め、他の苦痛も痛みを強めます
身体的苦痛を放置すると、「痛い」だけでなく、
眠り・食事・会話・意思決定まで揺らぎます
まず身体の痛みを和らげることでその他の苦痛も和らげることにつながります

Q&A 「モルヒネやオピオイド（医療用麻薬）って怖い薬？」

みなさんの疑問にお答えします

Q1:オピオイドとは何でしょうか？

A：医師の指示のもとで適切に使う鎮痛剤です
強い痛みを和らげるための大切な選択肢です

大切なのは「薬を増やすこと」ではなく、痛みの種類・強さ・生活への影響に合わせて

・非オピオイド ・鎮痛補助薬 ・神経ブロック
・オピオイド ・放射線治療

など必要な方法を組み合わせることです

Q2:使ったら依存症になりますか？

A：適切な治療と依存症は同じではありません

オピオイドには依存や誤用のリスクはあります。痛みの治療として医師の指示のもとで必要性和リスクを確認しながら適切に使用することが重要です。

Q3:オピオイドは「最後の手段？」「寿命が縮む？」

A：「最後の手段」ではありません

がんの治療と並行して「痛みを和らげる」ために必要な時期に使うことができます。

A：適切に使用することは「寿命を縮める」こととは異なります。

痛みを我慢すると体力や生活にも影響します。
オピオイドを適切に使用することで生活の質を上げることも可能になります。

Q4:オピオイドはできるだけ使わない方がいい？

A：痛みを我慢することが治療の目標ではありません。

痛みを適切に緩和することで眠る・食べる・動く・会話する・過ごしたい場所で過ごすなど患者さんが「大切にしている」ことを取り戻せる可能性があります。

WHOもがん疼痛治療目標を許容できる「QOL」が得られる程度まで痛みを緩和することとしています。

Q5：オピオイドを始めたら一生やめられないのでは？

A：必要な期間や量は人によって違います

がんの治療や痛みの原因が変われば減量・変更・中止を検討することもあります。痛みと生活のバランスを見ながら、必要な量を調整していく薬です。

「痛みを取る」 ➡ 「その人らしく過ごせる時間を取り戻す」
Pain Management is an Essential Part of Palliative Care

痛みを我慢しないために

～ペインコントロールその人らしく過ごすために～



痛みの緩和

薬や非薬物療法で痛みを和らげます



心の支援

患者さん・ご家族の不安や
つらさに寄り添いたいと思
っています



症状の緩和

吐き気・息苦しさ・不眠
・体のだるさなどを和ら
げます



その人らしさを支える

「どうしたいか」を大切
にしたいと思っています

痛みをゼロにすることだけが目標ではありません

「眠れる」「食べられる」「動ける」「家族と過ごせる」

その人らしい生活を取り戻すことが、ペインコントロールの目的です



季節行事～季節を感じる時間を大切に～

入院生活の中で、季節を感じ、人とのつながりをもてるように様々な行事をスタッフがおこなっています



オレンジサポート入院 ～家で過ごす安心を支えるしくみ～

【まずは「3泊4日の体験入院」から】

- ・病院の雰囲気や緩和ケアを知り、安心して在宅へ

【退院後は24時間365日つながる安心】

- ・退院時、オレンジカードを手渡し
- ・急な体調の変化も、いつでもスタッフに相談
- ・必要なときは、いつでも入院可能
- ・病棟からの訪問電話、訪問看護でサポート



住み慣れた我が家で暮らしたい。その想いを支えます。

ホスピスアート

「その人らしく過ごす」ために

地域包括ケア病棟は、急性期治療を終了し、在宅や施設へ移行するには不安がある患者様に対し、在宅復帰に向けて、医療管理、診療、看護、リハビリテーションを行うことを目的とした病棟です。

当院の地域包括ケアでは、「寝たきりにさせない、退屈にさせない」を大切にしています。そのため作業療法を取り入れています。手指を使い、心身の機能維持、向上を目標に、塗り絵、折り紙、ホスピスアート、個別のカレンダー作成を行っています。

患者様とスタッフとの交流の機会をつくることも目的としており、それによって、会話や笑顔が生まれることも入院中の大切な時間です。

デイルームのガラス窓をキャンパスに季節を感じます



会話と笑顔があふれる
ホスピスアートの時間



レスパイト入院

患者様が住み慣れたご自宅で過ごすことが出来るように、介護者（ご家族）を支援するための推奨されたサービスです。介護者の介護疲れを軽減するためや介護者の病気や入院あるいは冠婚葬祭の出席等で介護が一時的に困難になる場合に、患者様が一時的に入院することで在宅介護を支援します。

地域包括ケア病棟